

身分卑しからぬ男には、長年一緒に暮らす妻がいた。そのうち男は、とある人物の娘に懸想し、通いはじめる。娘の両親から、もとの妻と一緒に住みながら、娘のもとに通うことの不誠実さをなじられた男は、娘を自分の家に迎え入れると宣言してしまふ。これを知った妻は、身を引いて、男と暮らす家から出ていくことを決める。

妻が家を出る夜、馬上で月に照らされる妻の美しさに、男は思わず感じ入る。粗末な家に到着した妻は、心配する供の童に「いづこにか送りはせしと人間はば心はゆかぬ涙川まで」という歌を託す。妻の歌に感動した男は、妻を迎えに行き、通っていた娘の引き取りを延期すると娘の両親に伝える。そんな折、男は娘のもとを再び訪問する。

この男、いとひききりなりける心にて、「あからさまに。」とて、今の人のもとに、昼間に入り来るを見て、女、「にはかに殿おはすや。」と言へば、うちとけてゐたりけるほどに、心騒ぎて、「いづら、いづこにぞ。」と言ひて、櫛くしの箱を取り寄せ、白きものをつくると思ひたれば、取り違たがへて、掃墨ほいずみ入りたる畳紙たたみがみを取り出でて、鏡も待たずうち装束さうぞきて、女は、「『そこにて、しばし。な入り給たまひそ。』」と言へ。「とて、ぜひも知らず、きし①つくるほどに、男、「いととくも疎うとみ給ふかな。」とて、簾すだれをかき上げて入りぬれば、畳紙を隠して、おろおろにならして、うち口おほひて、優ゆうまくれに、したてたりと思ひて、まだらに指形およびがたにつけて、目のきろきろとして、またたきゐたり。

男、見るに、あさましよう、めづらかに思ひて、いかにせむと恐ろしければ、近くも寄らで、「よし、今しばしありて参らむ。」とて、しばし見るも、むくつけければ往ぬ。

女の父母、かく来たりと聞きて来たるに、「はや出で給ひぬ。」と言へば、いとあさましく、「名残なき御心かな。」とて、姫君の顔を見れば、いとむくつけくなりぬ。おびえて、父母も倒れ臥ふしぬ。

むすめ、「など、かくはのたまふぞ。」と言へば、「その御顔は、いかになり給ふぞ。」とも、え言ひやらす。「あやしく、などかくは言ふぞ。」とて、鏡を見るまに、かかれば、我もおびえて、鏡を投げ捨てて、「いかになりたるぞや、いかになりたるぞや。」とて泣けば、家のうちの人も、ゆすりみちて、「これ②をば思ひ疎み給ひぬべきことをのみ、かしこにはし侍はべるなるに、おはしたれば、御顔のかくなりたる。」とて、陰陽師おんみやうじ呼び騒ぐほどに、涙の落ちかかりたる所の、例の肌

なりたるを見て、乳母^{めのと}、紙押しもみて拭^{ぬぐ}へば、例の肌になりたり。
かかりけるものを、「いたづらになり給へる。」とて、騒ぎけるこそ、返す返す
をかしけれ。

注

- ① 白きもの ここでは、白粉のこと。
- ② 掃墨 すすから作った墨。眉などをかくために使う。
- ③ 畳紙 ここでは、はいずみを入れるために折りたたんだ紙。
- ④ きしつくる きしきし言うほど顔にすりつける。
- ⑤ 優まくれに 輝くばかり優雅に。
- ⑥ これをば思ひ疎み給ひぬべきことをのみ、かしこにはし侍るなるに こちら（娘）を殿がおいやになることばかりを、あちら（もとの妻）ではしているということですので。娘の顔は、もとの妻が呪詛をしたことによるものだと考えている。
- ⑦ いたづらになり給へる 美しい姫君が台無しにおなりになった。